

## 北国の生涯型住宅(上)

北海道大学大学院工学研究科  
助教授 野口孝博氏

6/20/2000 12:00

### はじめに

西暦2000年には、これからの時代、私たちの生活環境がどうなっていくか、あるいは、どうしていったらいいのかということで、少し皆様方に考えていただく材料を提供できたらと考えております。

最初に、今から30年後、2025年あたりには日本の人口構成がどうなるかを見てもみますと、ご承知のように高齢化が進んで、65歳以上の人口は25~26%のところになるとされております。現在の高齢者人口は13~14%というところですから、7人に1人ぐらいの割合になります。それが30年後には4人に1人ぐらいということになります。

高齢化の「速さ」を他の国と比較してみますと、65歳以上の高齢者人口が7%から14%になった時間で比較してみますと、日本の場合、1970年から95年の間、25年間を要しましたが、他の国々ではこの間、数十年から百年以上を要しているのです。日本の高齢化の速度が極端に高いことを示しています。

### 住まいづくりの発想転換

よく言われている「在宅介護」とか、「保険制度をどうするか」といった問題も、7人に1人の現状から、4人に1人の状況になったら、65歳以上だからといって、他人のお世話になるということは極めて困難になってくるということが予測されます。結局、高齢者も自分達で自らを支えて行かなければ社会は成り立たないという状況になるでしょう。

ですから、高齢者になるべく自立して暮らせるように、今から、地域も町も、住まいも、家の中の部屋も、全部その状況に向けて用意して行くことが必要になるだろうと思います。

もうひとつ、時代の変化の状況で考えなければならぬのは、地球環境の問題で、今迄のように、簡単に

壊して作り替えるということはやめなければなりません。それから、北海道の状況を考えてみると、住宅は戦後確かに防寒性能や機能性など、優れたものを目指して作られ、ある程度その目的は達成されています。

しかし、住宅としてそれで十分でしょうか。たとえば「防寒性」や「機能性」だけでは住宅は満足できないわけで、それらを土台にした上で居住性やメンタルな部分、精神性に応えるような部分もこれから考えていく必要があるだろうと思うわけです。

高齢化という条件、あるいは地球環境の問題、それから地元北海道の住宅の現在の状況を考えて「それではこれからどういう方向に進めていくのが良いのか」というふうに考えて行きたいと思えます。

### 生涯型住宅——住み続けられる価値

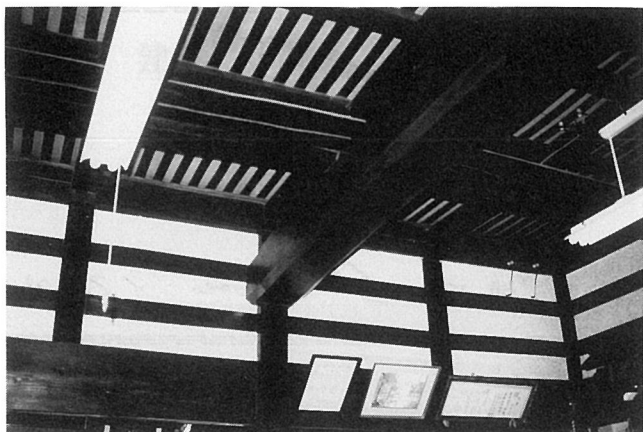
長い年月の間「暮らし続けられる住宅」というものが今後求められるようになると思えます。もうひとつは、元気な人だけでなく、様々な人々と共に住める「住まいづくり」が求められてくるということです。その考え方として「ユニバーサルデザイン」あるいは「生涯型住宅」ということを考えてみたいと思えます。

それでは、具体的に「生涯型住宅」というものが、どういうものを指すのかというと、必ずしも決まった定義がある訳ではないのですが、私としては次の4点を考えております。

- (1)「長持ちする家」
- (2)「住みこなせる家」
- (3)「安心できる家」
- (4)「気持ちがなごむ家」

### ○長持ちする家・・・耐久性と愛着

「長持ちする」ということは当然耐久性があって、



大切にしたい家・素材  
（北国に今も残るワクノウチ造り）

丈夫だというふうに思うわけで、北海道でも「百年型住宅」というものを最近研究し始めましたが、ハードの面はそれなりに、条件さえ整えば百年とか百五十年とかのものは出来るかと思えます。しかし、それだけで「長持ちする」、「住み続けられる」家になるわけではなく、はたして日本人がその家に本当に住むかどうか、ということも捉えておかなければなりません。ここでは「長持ちする家」の説明として「愛着」という言葉を使ったのですが、精神的なものに関わる部分も、きちっとおさえておかないと、簡単には人々に住み続けてもらえないだろうと思えます。

フランスの例ですが、百年以上の古い農家が今でも使われております。設備の部分は現代の生活に合うように改造してありますが、骨太の梁組はそのまま利用しています。何ともゴツゴツした感じなのですが、好んでそれを利用しているわけです。

こういった例は日本にもないわけではなく、北海道でも、70~80年前のものですが、富山の「ワクノウチ造り」というもので、これを北海道の栗山町に持って来て建てたものです。富山は雪の深いところですから、梁組がガッチリと造られています。このように風土にしっかりと合っていて、人々に「これは無くしたくない」という気持ちを起こさせるような造り方、これからはこういうものを提供していかないと、単純に「丈夫に」「便利に」と造っても、必ずしも百年、二百年と続けて使われていくとは限りません。

### ○住みこなせる家

・・・たくわえの文化と余裕のスペース  
日本人は他人が長く住んだものを上手く使いこなす

ということに対して一般に抵抗を感じます。

しかし、古い時代にはそれに対する対応のし方も知られていました。農村住宅で百年以上続いて使われているものもあります。古い伝統では、そういう場合、非常に<sup>うま</sup>上手いやり方でリニューアルしてしまう方法を知っていました。古いものを簡単にフレッシュにしてしまうやり方をシステムとして持っていたわけです。つまり、畳や障子や襖を取り替えて、一瞬にして、まったく新鮮な別の空間にしてしまうシステムです。残念ながら、今ではそのシステムは無くしてしまっているわけです。

「住みこなせる家」には「空間的な余裕」を与えることが必要ではないかと思えます。

北国の住宅は、断熱の仕方が、少しずつ変わってきておりました、従来のように壁、天井、床で断熱するのではなくて、屋根面、足元の基礎断熱という風になってきています。そうすると、屋根面-外壁-基礎で囲われた全ての空間を使いこなすことができるわけです。この利点を積極的に活用するやり方を考えて、新たにできた部分をどう、<sup>うま</sup>上手く、生活空間に取り込んでいくか、を考えていく必要があると思えます。

小屋裏とか足元の部分は本州の伝統的な住宅では、たんに風通しの部分であるとか、ほとんど使われない部分だったのですが、北国の住宅ではそれが、生活空間の中に入れることができるわけですから、それを何か上手な使い方をするのが賢明だというわけです。これが、余裕空間になるのではないのでしょうか。

長く使うのであれば家族が膨脹する時もあり、縮小する時もあり、また他人が入ってくるケースもあるわけです。ですから三十年、五十年、百年、使おうとすれば、当然そういうことをすべて考えていかなければなりません。そういう中には車椅子の方も入ってくるわけです。これからは住宅というものをそのように考えないとならないわけです。このような変化に耐え得る家は、キチキチの家ではやっぱりもの足りないということになってしまうわけです。

そういう変化に対して、<sup>うま</sup>上手く内部で吸収できる空間をシステムとして持ち込んだ家を提供していく必要があるだろうと思えます。

### ○安心できる家

・・・シンプルデザインとバリアーフリー  
「安心できる家」というのは「丈夫な」ということ

にも通じるのですが、北国ではできるだけシンプルな形状のものが安心できます。北海道によく見られる三角屋根の家はヨーロッパの北部にもよくみられます。北欧でも、ドイツでもフランスでも、一戸建てですと大抵三角屋根です。北海道でも最近はそのような形のものできていますが、基本的には安定した形、頭を重くしない形で作っておくということが良いことです。シンプルな形にしておくことは寒冷地では一番合理的です。

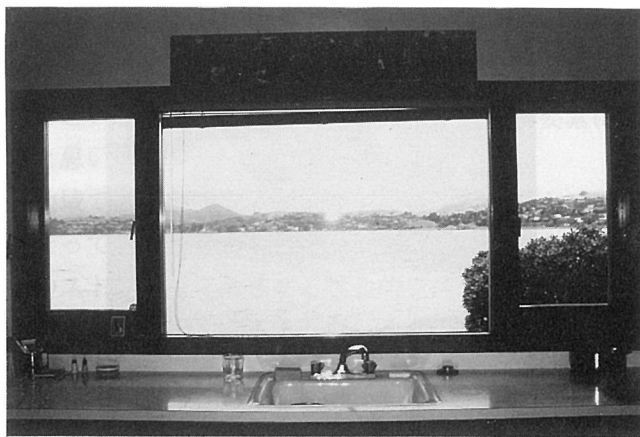
さらに、「安心できる」ということで言えば、高齢者、あるいは車椅子を利用する人が入るといった場合も十分に考慮して、それらの人々が「使いきれぬ家」「バリアフリーの家」、これからはそのような考え方を当然組み込んで、安心できる家造りを目指していく必要があるだろうと考えています。

### ○心なごむ家・・・味わいとながめ

「心なごむ家」ということは具体的に表現するのはむずかしいことですが、これからは「丈夫」「便利」「快適」これらに加えて、もう一段上のハイクオリティのところを目指して行く必要があるだろうと思います。それが獲得できないと、「愛着の持てる家」あるいは「長もちする家」にはつながって行かないのではないかと思います。

私がアメリカに行った時、サンフランシスコで或る建築家に案内してもらった一戸建ての高齢者の家のことですが、奥様が自慢気に見せてくれたのは台所です。その窓からサンフランシスコの湾をはさんで対岸の町まで見渡せるのです。夜になったら、夜景は素晴らしいものでしょう。

確かに主婦が台所にいる時間は長いものです。どう



海に見える台所

して北側の、つまらない景色しか見えない、場合によっては何も見えない窓にしなければならないのでしょうか。今までの建築設計者の常識では、居間からは景色が楽しめるようにしますが、台所の窓は北側で良いとする傾向がありました。

窓から見える「眺め」というもの、人間の「感性」あるいは、もっと強い意味で「生き甲斐」につながるようなものを台所で考えても良いと思うわけです。

札幌のごく普通のお宅の例ですが、食事をするときに鳥が来ているのを見たいということで、庭にバードテーブルを置いているのですが、鳥をみる視角などが大変良く設計された窓があります。窓台に肘を置いて、良い角度で小鳥を見ることができるといった気配りが感じられる設計です。このような気配りによって、その場所は豊かになり、ひいては「生き甲斐」というと大袈裟ですが、そんなものができ上がってくると思います。こういった「豊かさ」は別に外の「眺め」だけに限ったものではありません。そこに居ることが喜びであるような空間にする。それが「なごみのある住宅」です。

### 魅力ある暮らしと間取りのくふう

どうせ住むなら、日々使いやすいのは当然ですが、住んでいて何か感じるものがあるといったものにつながっていけばと思います。

### 開放的な室内・・・広さの演出

北海道では家の中で暮らす時間がどうしても多くなります。とくに冬は屋外の利用が限られます。本州と比較調査してみると、本州の方では、冬でも子供の遊びなど、色々屋外が使われますが、北海道ではそれらを全部家の中に取り込まざるを得ないこととなります。

そうすると、家の中に北海道に特有な色々なものが要求されてくることになります。そのひとつは「広さ」だと思います。家の中に居る時間が長いために家族が一カ所に集まる暮らし方が北海道では多いわけです。あるいはこれから先の時代の生活を考えると、もっと様々な人々と、様々な「集い」を持つことが求められてくると思います。北国はそれをするにはまさに相応しい風土条件と住まいの条件を持っている所だと思います。

冬は外を使えないのだから、いっそのこと家の中で「集い」や普通屋外で行なわれる色々な活動を、家の中でできるようにしたらどうでしょうか。家がある場所になってもいいのではないのでしょうか。幸い、北海道の住宅は一般に居間が結構広いので、（本州と比べると倍ぐらいあるのは普通です）それを拠りどころとして、あるいはもっと広くして、居間から食堂、台所、和室も、ひとつにして、大空間の「居間空間」「集いの空間」と考えてしまってもいいのではないのでしょうか。段差などを取り払い、ひとつのおおきな部屋として利用することにより、バリアフリーにもつながってくるわけです。

和室は、以前は夫婦寝室として使われておりましたが、現在は調査してみますと、そういう使い方はほとんどなくなっています。個室の利用は、ほとんどは二階に上がっています。

それにもかかわらず、一階に和室をとる家は結構多いのです。何に使っているかという点、多目的に使っており、普段は開放して、お客様が来た時だけ、襖で仕切って和室として利用しているというわけです。それは多くても年に何回かで、つまり、一年の大半は居間とつながった空間として利用されているわけです。

それならばいっそのこと、仕切りを取り外して、居間の一部として、一緒に考えてしまう方が良いのではないかと思います。そうすればたとえば二間の幅全部を使って、十分に広い空間が利用できるようになるわけです。一年に数日はお客様のために使えるように、可動間仕切りなど工夫して、設置すれば良いわけです。

そのような工夫で「広さ」を確保する。そうして居間の中の生活の「活動性」に対応しようというものです。

もうひとつ、居間の部分で最近の傾向を少しお話いたします。人の「動線」が家の中をグルリと一回りできるプランです。これを回遊動線と名づけましたが、最近こういうものが出て来ています。以前ですと、北海道の住宅では、居間を中心とした放射状の動線が一般的だったのですが、これは暖房機を置いた居間を中心にした生活に適しておりますし、暖房をしやすいという点からも有利でした。

マイナスはどこに行くにも必ずここを通らなければならぬということです。（それにもプラスの点はあるのですが）この中心の位置を、お客様や誰かが使っていると、他の人間の行動は妨げられることになりま

す。

その点、回遊型にしておくと仮りに居間にお客様がいても、家族は逆のコースを利用して目的の行動が達成できます。あるいは、中心でパーティなどに利用している場合、その裏側をサービス用の空間として利用できることとなります。このように家のなかで、上手に暮らしの場面を使い分けられます。さらに、これから車椅子が家の中に入ってくることを想定した時、この回遊動線は大変都合が良いのです。つまり、車椅子の方向転換の回数が少なくなります。このような回遊動線は住宅の「ユニバーサル化」という点からも推奨できるものです。

### 空間を使いきる・・・足元から天辺まで

ここでは、地下室つまり足元の部分から、小屋裏の部分の利用の話をしようと思います。

従来、三角屋根の家などは、真ん中の部分だけ使って、両側の斜め天井になるような部分は使わないということが多かったのですが、こういった部分も全面的に使いきるようにするとどうなるのでしょうか。最近はそのようなケースもふえています。

そうすると、さらに高い部分まで色々なスペースがとれるようになるわけです。二階の子供室の上に彼らの秘密部屋のようなものを造るのもいいでしょう。あるいは、斜め天井を「現わし」にする場合もあります。そこに屋根窓をつけて、その下にベットを置くという



小屋裏利用の子供室一星をながめて

やり方もなかなか良いものです。

屋根窓を通して、室内から星を見たり、雲を眺めたりというものも暮らしの豊かさのひとつです。

もうひとつ、足元の方はどんな開発があるのかということですが、法律改正で地下室の方も少し造り易くなったようです。

地下室の特性を少し整理してみますと、ひとつは環境的特性、つまり土の中にあるわけですから地上の温度に比べて変化が少ないという特徴があります。それを利用するとワインセラーなどにはピッタリの所になるわけです。あるいは漬物や食品の貯蔵にも良いわけです。

これらは普通の地下室の利用方法ですが、これに加えてもっと面白いことも出来るわけです。例えば音に関係したこともそのひとつです。コンクリートで囲われた遮音性の高い空間になりますから、木造の住宅ではなかなか得られない特性をもっています。木造部分は、どうしても外の音が聞こえたり、家の中の音が伝わって来たりしますが、足元の地下室は非常に遮音性が高い空間になります。そうすると、地下室では木造ではなかなか得られない特別の世界が得られるのです。

たとえば、工作室、ここでは、「出しっぱなしにしておける」という良さがあるわけです。「男の夢空間」とでも呼べる空間です。絵を途中にして置いておくこともできます。もしかしたらこのような空間から、隠された才能が発掘されるかも知れません。

カラオケなどを置いておくのにも都合がよいのですが、楽器類の練習用には大変都合がよいものです。ただし、音響的に厳密に見ると、相当上手に設計しないと、「反響」の点など結構難しい面もありますが、音楽練習中の色々な音を、他人に気にせずに来るといえるのは大きな利点です。

また、こういう空間があれば、お客を大勢集めてワイワイ騒ぐことができるようになります。家の中で騒げるということは、これからも非常に大事な要素になると思います。

地域でも社会でもそうですが、ある種のストレスが高まってくることは避けられないでしょう。そこで、そのストレスを発散させる社会的システムというものを我々は作り出してきました。それを「文化」といっても良いでしょう。

住宅の中でもそれは必要なわけで、以前のように「向こう三軒両隣り」といった形で、極めてオープン

な地域社会が形成されているのはひとつの理想ですが、それが出来ないような社会構造になってきてしまうと、人は色々なところで我慢を強いられることになるわけです。もちろん子供達も日常我慢を強いられておりません。

そこで、地下室では我慢をしないで、思いきり派手に自己を主張できる所にしたらどうかと考えるわけです。

大声を出すというのはストレスの発散に良いことです。残念ながら、今の住環境では、大声を出すことが許されません。そういう意味では地下室はひとつの「救いの場」であろうと考えています。ある建築家は「瞑想の場」が必要であるという主張をもっておりまして、地下室に茶室を設けました。音がない静寂の世界が得られるのが、地下の茶室の、他に得がたい特徴であると述べられています。

### 活動的な生活・・・居間と土間

家の中に「子供が遊び回れる空間」を作った例をご紹介します。

北海道では冬は遊びが家の中に入って来ます。それをうまく受け止めてあげなければなりません。そこで大人の遊びまで、まとめて全部家の中に入れてしまおうという発想です。またそこを居間にしてしまおうという考えもあるわけです。居間だからといって、サイドボードがあって、絵が飾ってあって・・・という必要はないのです。最初から、ボール投げでも何でもできるような空間にしておいて、そこで接客するという居間があっても良いのではないかということです。フォーマルな居間を別に作っても良いのですが、一つにしておくという事も考えても良いと思います。たとえば壁に全面的に木材を張って、活動的な生活に十分に対応出来るようにしておくということも考えられます。

もうひとつ、家の中に入って来る色々な活動的な生活に対応する空間として、「土間」を提案しております。

北海道では、子供の遊びもそうですが、洗濯はもちろん物干しとか、日曜大工のような作業的な活動を、家の中でやっています。居間で鋸を使った作業などすることがあります。散髪を家のなかでやったりもします。雪のない地方ならばそれらは外でできるわけで、庭はそういう働きもあるわけです。

そこで、外から入ってくる活動的な生活に対応する専用の空間を家の中に作ったらどうかというのがこの「土間」です。この発想はそう新しいものではなく、京都の町家で片側に通っている「通り庭」とか、農家にある大きな土間とか、それらから借りてきているのです。もちろん「土間」といっても土ではなく、防水舗装したタイル仕上げにしておきます。そこを色々なことが出来るようにしておくのです。

北海道では、冬には雪で濡れたものが外からどんどん入ってきます。これらのものを土間に受け入れて、同時にそこを乾燥室にしておきます。濡れた靴なども全部そこに置いておきます。

玄関から、居間上がる普通の動線の他にもうひとつ「土間」を通る動線を設けてあるわけです。

住んでいる人に伺ってみると、やはり「乾燥室」としての利用が一番多いようです。子供さんが3人おり、普段の洗濯のほか、スキーの関係のものとか、乾燥に大変便利なようです。そうすると主婦も精神的になごむようで、たとえば、子供が外で遊んで雪まみれになって入ってくるというような場合、たいていは、ちょっとした戦争のような騒ぎになります。家を管理する主婦とすれば、つい子供達と戦争状態になってしまうのは、よくあることです。このような場合に、土間を通る動線を設けておけば、もめごとはたちまち消えるでしょう。それは、土間が「汚れてもいい空間」であるからです。こういうものは北国の家が本来備えるべき

ものだと思います。雪のない地方では外空間がそれをまかなっているわけですが、北国ではとくに冬にはそれができません。そこで、屋内に、その役割を持った空間を取り込んでおくのです。この事は、これからの住宅の基本要素のひとつになっていくのではないかと思います。



ユーティリティ土間。  
ボイラー室と兼用

(次号につづく)

## WOODY クラフト

### サッカーボール

協立工芸製作所（旭川市）

樹種：みずなら、かば

サイズ（径）：大 40cm, 中 30cm, 小 20cm

価格：大 157,500円, 中 105,000円,  
小 73,500円

貯金箱になっている。開け方は秘密。

